

平成28年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成28年4月～平成29年3月

1. 学校概要

学校名 岡崎市立新香山中学校

種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他（ ）

所在地 〒444-2141
岡崎市桑原町字大沢20番地86

E-mail sinka@st.oklab.ed.jp

Website http://www.oklab.ed.jp/weblog/sinka/

児童生徒数 男子 224 名 女子 186 名 合計 419 名
児童・生徒の年齢 12 歳～ 15 歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか（ ）

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成 －環境学習を基軸としたESDの展開－

1 はじめに

本校は、岡崎市の最北端に位置し、市の中心部から十余キロメートルもの遠隔の地である。学校の東には段戸の山に連なる山々と溪谷、西は豊田市と接する巴川、南は村積山・ふもとを流れる霞川、北は群界川等のある自然豊かな地域にある学校である。生徒はそれらの豊かな自然から多くのことを学んでいる。だからこそ、自然を大切にし、自然に感謝する心を育みつつ、自然は無尽蔵ではないということの実感を伴いながら、より高い意識で環境に学ぶことができると考える。そこで、本校の恵まれた自然環境を大いに活用した環境学習を通して、将来の環境について危機感や切実感を抱きつつ、環境問題を自分事ととらえ、自らの行動意欲を高めさせたいと3年間で系統的に学習を展開させている。また、地域の大切にするササユリの保護活動をはじめ、清掃活動など様々な地域の活動にも「ふるさとを愛する心」のもと、積極的かつ自主的に取り組んでいる。各活動に取り組む真摯な姿から、現在も生徒は高い意識で環境学習をしていることがわかる。しかし、系統化された学習・活動は、見通しをもって計画的に進められるという反面、新鮮さに欠け、「新たな発見」も少なく、マンネリ化も否めないという課題が出てきた。また、平成24年の研究発表会当時とは、学級数や学習環境も大きく変わり、現状に即した取り組みにするための見直しが必要であった。そのような折に、階上中学校との学校間交流の機会をいただいた。

2 研究の構想



3 学校間交流

交流を通して、地域学習に限らず、グローバルな視点から他の地域との関わりを考えさせた教育活動を展開していくことができなにかと考えた。また、他地域との比較などから多様な考

え方ができるようにし、より自分自身や自分の住む地域に目を向け、地域への愛着を深めるとともに自分が環境を守ろうとする意識を高めていくこともねらった。さらには、抱いた思いを「行動化」へとつなげていくような実践を目指した。



階上中学校では、防災学習の最終目標として、「未来の防災リーダーの育成」を掲げ、自助・共助・公助の3つをテーマに実践している。1年生で「津波のメカニズム」、2年生で「救急救命・応急手当」、3年生では「防災啓発活動」を軸に学習を展開している。それらの学習の理解を深めるために、防災カルタの実施や、避難訓練や避難所設営、災害図上訓練などを行うことで、知識として得たものが有事の際に発揮できるようにしている。

また、震災被害の風化防止も最重要課題の一つとして掲げ、多くの学校と交流し、交流の際、活動の一環として生徒に震災のことを語らせる機会を設定している。生徒は、語るたびに震災について考え、見つめ直すことを繰り返す。その活動を続けることで、風化防止意識の持続を図っているということである。

そのような情報をもとに本校2年生の学級代表8名と生徒会担当教員2名が夏休みを利用して、階上中学校に行き、交流活動を行った。グラウンドの仮設住宅の案内では、アスファルトで舗装され、グラウンドとは思えない状態に本校の生徒は衝撃を受けていた。また、学校の脇に作られた仮設グラウンドにも案内された。そこは、狭いだけでなく、石もごろごろとあり、とても厳しい環境であった。生徒にとっては、想像を超えた実態を実際に目にしたり、聞いたことで、衝撃も大きかったようである。グラウンドに限らず、校舎のひびが震災当時のままの痛ましい現状に、震災から5年以上経過した今もなお不自由な中で生活をしている同年代の生徒の現状は、自身の平穏な環境を再認識したに違いない。階上中の生徒と一緒にいった防災カルタや新聞スリッパ作りでは、楽しみながら、防災について学ぶ姿が見られた。ゲームや制作活動を通して、「防災」についての関心も自然に高まっていた。また、自身の地域の「防災」についても目を向けるとともに、階上中がキーワードとして掲げている「自助・共助・公助」の考え方に着目し、自分に何かできることはないかと「行動化」への意識を抱いた。抱いた思いや学んだことを全校生徒に発信する場を設定したことで、「行動化」への意識をより高めることにもつながった。今後は地域にどう発信するかが課題である。



■参加した生徒の声

- ・身近な人と助け合って共助していくためにも、自助が大事だと思った。私は、緊急時にどこに避難すればいいか、家にどんな備えがあるのかを知らないの、今後に向けてどんな準備ができるのかを家族と一緒に考えたい。
- ・新香山中学校は、海から遠いので津波の心配はないが海拔どれくらいの高さにあるのか気になった。新香山中学校では、避難訓練くらいしか防災対策を行っていないので、他にはどんな防災対策があるのか、またどんなことをしていかななくてはならないのかについて学習してみたいと思った。
- ・階上中学校は、「防災」について、全校生徒が真剣に考え、危機意識をしっかりとって活動に取り組んでいると思った。僕たちの学ぶ「環境」についても、もう一度学び方を見直し、自分の地域を守るという意識をみんながもてるような活動を工夫していきたい。



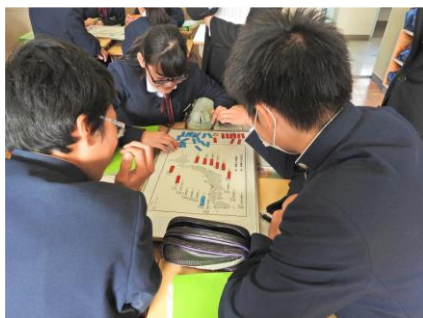
4 ESDの視点に立った学習指導

ESDの視点に立って、育みたい力として、「問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方を重視して体系的な思考力（システムズシンキング(systems thinking)を育むこと」「批判力を重視して代替案の思考力（クリティカル シンキング

(critical thinking)を育むこと」「データや情報を分析する能力、コミュニケーション能力の向上を重視すること」が挙げられ、さらに「人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重といった持続可能な開発に関する価値観を培うこと」も重要とされている。

そこで、E S Dの視点に立った学習指導を進める上では、教材（学習課題、学習内容）を内容的・空間的・時間的につなげること、学習者同士、学習者との立場・世代の人々、学習者と地域・社会などをつなげること、身に付けた能力や態度を具体的な行動に移し、実践につなげることが重要であると考え、実践を重ねてきた。

◆ポイント① E S Dを教科横断的に実施する〈E S D新香山プラン〉



E S Dにおける学びは、各教科はもちろんのこと、あらゆる学びを通じた知識や技能等を統合していくことが重要である。教科横断的な学びという点では、E S Dは総合的な学習の時間のみ実施するものではない。どの教科においても、持続可能な社会の構築に関わる内容を扱うことがE S Dの学びを深めるために必要なことである。その上で、重要なことは、教科等横断的な授業を行う際には、問題解決に向けての考えを深め、地域や日常生活に存在する具体的な課題とつな

げて考え、身近なものとして捉えて行動までつなげるという、E S Dの視点に立った教育を行うことである。

◆ポイント② E S Dを通じて環境教育を行う

E S Dのテーマとして地球規模の問題を扱う場合、問題が学区を越えて展開されていることが考えられる。このことからE S Dの学びは、他の地域が抱えているそれぞれの課題について学ぶことと関わりがある。問題解決にあたって、様々な人との連携が必要であることを生徒が認識した上で他地域の様子や考え方を調べたり、取材したりすることなどが大切になってくる。さらに発展してテレビ会議システム等によって、県外や海外の学校との交流を行うことも有効であると考えている。

◆ポイント③ 教員の連携を図る

E S Dでは、総合的な学習の時間を活用するなどして、教科を横断して同一のテーマで授業を展開することが有効であるが、教科間の授業の進め方について調整を図る必要があります。この調整については、教員同士の連携が重要である。今年度の2年生「企業のエコ活動について考えよう」については、単元の授業展開を全てE S Dのコンセプトで構築する「岡崎市環境プログラム」をアレンジして活用し、学年スタッフが指導内容の共通理解を図ることができたと考える。

5 「E S D」で学校づくり

私たちの学校の教育活動の特色は、教科学習、総合的な学習、道徳・特別活動、生徒会活動等の営みすべてにわたるE S Dの推進である。E S Dが、学校教育の様々な場面で、意識的に推進され、持続可能な未来を築く生徒が育っていく、そのような学校づくりが、私たちの目指すところである。

ご指導いただいている文部科学省視学官田村学先生より、課題として「クリエイティブな思考のできる生徒」を目指したいとご示唆いただいた。今年度の交流活動は、まさに新たな一歩として位置付けることができる。交流活動は他校と比較しながら、自らを見つめ直し類似性や特殊性を再認識する良い機会となる。何より、同性代の生徒の多様なものの見方や考え方に触れることは、大きな刺激となった。新たな気付きは、「もっと学びたい」という次への意欲につながる。生徒自ら次の課題を見付け追究する姿は、まさに「クリエイティブな思考」にもつながっていくと考える。今後、より深い学びにつなぐために「行動化」のプログラミングに目を向けさせていきたい。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）